





## 所長挨拶

### 大槌沿岸センターの設立50周年を迎えて



東京大学大気海洋研究所 所長  
兵藤 晋

東京大学大気海洋研究所の大槌沿岸センターは、今年で50周年を迎えることになりました。本センターは、1973年に教授1名と助手4名からなる大槌臨海研究センターとして設置され、物理・化学・生物・地学という幅広い分野をカバーする海洋科学の総合的な沿岸研究拠点としてスタートしました。全国から年間5000人・日を超える研究者が集まる共同利用・共同研究施設として、三陸リアス海岸に位置する豊かな生態系を持つ地の利を活かし、さまざまな分野の沿岸海洋研究が大槌で進められてきました。ちょうど設立30年を迎えた2003年4月には、教授・助教授・助手各2名ずつへと増員した国際沿岸海洋研究センターへと改組拡充され、沿岸海洋科学に関する国際共同研究の推進拠点へとその役割を拡大させました。

その後の20年間、さまざまな変化を経験しながらも、ここに50周年を迎えることができました。なかでも、最も大きな出来事は、2011年3月11日に起こった東北地方太平洋沖地震であり、このとき引き起こされた大津波はセンター研究棟の3階まで到達し、すべての研究施設が壊滅的な被害を受けました。大槌町自体が壊滅的な被災をした中で、大槌町の皆様のご支援とご理解、そして東京大学の全面的なバックアップにより、損傷した研究棟の3階部分を応急的に整備して研究教育活動を継続することができました。調査船も再建、2018年2月には新たな研究実験棟と共同利用研究員宿泊棟を高台に移転し竣工しました。その過程では、津波が海洋生態系に及ぼした影響を長期的に調べる研究が、文部科学省の大型研究プロジェクト「東北マリンサイエンス拠点形成事業－海洋生態系の調査研究－」として進められ、国際沿岸海洋研究センターがその研究拠点のひとつとなりました。2012年4月には、10年時限の「生物資源再生分野」が設置され、沿岸生態分野、沿岸保全分野とともに3研究室体制へと強化されました。さらに2013年10月には、国立研究開発法人海洋研究開発機構が所有する東北海洋生態系調査研究船新青丸（1,629トン）が大槌港を母港として就役し、東北地方の沿岸を中心に船舶共同利用研究の企画・運営、観測研究を進めてまいりました。

このように、国・県・地域・大学からの多大なご支援があつての再建でしたが、1973年以来の、本センターで全国の研究者が積み上げて来た研究成果がなければ震災後の影響研究は成立せず、50年間という歴史の重みをあらためて感じています。

現在は、沿岸海洋研究の拠点としての活動に加え、地域社会の復興と発展に対して科学の力で貢献しようという活動「海と希望の学校 in 三陸」を進めています。この活動は、東京大学の社会科学研究所との連携のもと、地域の方々と協働するものです。海をベースに地域に希望を育む人材の育成を目指すこの試みは、大槌から始まり、三陸の様々な地域、さらには鹿児島県の奄美群島でも進んでいます。今年の夏には、東京大学柏キャンパスにおいて、大槌高校の生徒と与論高校の生徒が協力してサイエンスキャンプを実施するなど、大きな発展と未来を示しています。

2022年には、国際沿岸海洋研究センターは、本所の国際連携研究センターと統合し、国際・地域連携研究センターへと改組拡充されました。この改組には、我が国の特徴である亜寒帯から温帯・亜熱帯まで連続する生態系を包括的に理解し、温暖化等による影響評価や対策に貢献するという目的があります。さらには、国内だけでなく、東南アジア諸国などとの国際連携の強化を視野に入れています。そのため、地域連携研究部門には大槌研究拠点（大槌沿岸センター）に加えて奄美研究拠点準備室を、国際連携研究部門には東南アジア連携研究室を新設しています。このような現代社会を取り巻く課題解決においても、大槌沿岸センターはこれまで以上に重要な役割を果たすものと確信しています。50年という歴史を経て、さらに60年、70年と我が国の沿岸海洋研究の中心を担うことが大槌沿岸センターの使命であり、私たちは研究所を挙げてその発展に取り組んでまいります。これまでの50年間に対して、あらためて地元の方々をはじめ関係の皆様へ深く感謝するとともに、今後のさらなるご支援をお願い申し上げます。